梅花女子大学文化表現学部紀要:学術論文, 20:102-113

感情形容詞で読む源氏物語

―紫上と明石君―

中川　正美

一　源氏物語の形容詞

源氏物語は先行後追の仮名物語に比して、形容詞の異なり語数も延べ語数も多い。形容詞は名詞や動詞に比して対象の捉え方がもっとも直接的に反映しやすい。形容詞は状態性形容詞と情意性形容詞に大別されることが多いが、なかでも情意性形容詞は、語り手にしろ、作中人物にしろ、表現主体の意図を如実に浮かび上がらせる。

阪倉篤義氏は「歌ことばの一面」（「文学・語学」一〇五号、一九八五年五月）で、形容詞を、客観性の強いものから主観性の強いものへで分類し、情意性形容詞をさらに、「程度形容詞・評価形容詞・感情形容詞」に分類された。氏が評価形容詞と感情形容詞を立てられたのは文学研究にとって有益である〈注1〉。物語で、人と人との関係がどのように構築されているかをみる場合、「うつくし」「うるはし」「なまめかし」といった美意識を表す評価形容詞ならば、誰がそのように対象を見ているか、平安仮名文の表現はステロタイプであることが多いので、その人物に固有の美と考えていいのか、同時に複数の人物間で描き分けられているか、場面によって異なっていないかなども考慮することが肝要で、まとまった像を結ぶのは容易なことではなく、読者はその時点での、人物に付された美意識を受けいれるほかない。一方、感情形容詞ならば、作中人物や語り手がそう思いそう感じるわけで、読者は場面や状況からその感情が素直な発露かどうか推察なり判断なりすることが可能である。感情は変化することもあり、作中人物のその時点での思いとして、人と人との関係性を認めやすい〈注2〉。本稿では、感情形容詞から、紫上について、これまで見過ごされてきた、明石君との、けっして単純ではない緊張関係〈注3〉を考究していきたい。

二　紫上の変化

若菜上巻で、春宮の若宮が誕生して後、紫上の明石君への対応に変化が生じたという。

(1)　日々に物をひきのぶるようにおよすけたまふ。（中略）御方の御心おきての、らうらうじく気高くおほどかなるものの、さるべき方は卑下して、憎らかにもうけばらぬなどを誉めぬ人なし。対の上は、まほならねど、見えかはしたまひて、さばかり許しなく思したりしかど、今は宮の御徳にいとむつましくやむごとなく思しなりにたり。

（若菜上一一一）〈注4〉

明石女御が産んだ若宮は日々、物が引き延ばされるように生長していく。ご生誕時、明石君は、若宮をかわいがるのは紫上に任せて、実の祖母でありながら御湯殿の儀では女房が奉仕する迎え湯役を務め、以後も紫上を立て、この時点まで後見役の女房として、お世話や日常の諸事を品よくおおらかに執り行い、でしゃばらず補佐役に徹していた。

紫上は女御を三才で引き取ってから、愛情を傾け、丹精込めて育て上げ、女御にも慕われて、一二歳になった入内の際には母として付き添い、三日後の退出時は輦車の宣旨を受けるという栄誉に浴した。しかし、紫上は女御を妊って産んだのではない。実母は、源氏が都を離れ須磨に流謫した後、迎えられた明石で知った元受領の娘、明石君である。紫上に

おもしろからぬ想いがあったのは想像に難くない。その明石君を紫上は以前は「許しなく」思っていたのに、今は「むつましく」大切に思うようになったというのである。若宮を介してのこの変化、そこにどんな経緯があったのか。それを探るには、遡って辿っていかなくてはならないが、それにしても、「さばかり許しなく」思っていたとはおだやかではない。「さばかり」というからには、怒りの程度も甚だしかったろうし、一度ならず何度も許せないと思っていたと知られよう。紫上の怒り、許容できないという想いはどのようなものであったのか、それは、どう語られてきたのだろうか。

似たような紫上の感情の動きが、これに先立って、薄雲巻で語られている。

⑵　舟とむる遠方人のなくはこそ明日かへりこむ夫と待ちみめ

いたう馴れて聞こゆれば、いとにほひやかにほほ笑みて、

行きて見て明日もさね来むなかなかに遠方人は心置くとも

何ごととも聞き分かで戯れ歩きたまふ人を、上はうつくしと見たまへば、遠方人のめざましきもこよなく思し許されにたり。いかに思ひおこすらむ、我にていみじう恋しかりぬべきさまを、とうちまもりつつ、ふところに入れて、うつくしげなる御乳をくくめたまひつつ戯れたまへる御さま、見所多かり。御前なる人々は、「などか同じくは」「いでや」など語らひ合へり。（薄雲四三九）

これは光源氏が娘を手放した明石君を思いやり、大堰を訪ねようとして、紫上に外出の挨拶をする場面である。引き取ったのは一二月で、これは新春の行事が一段落した時だから、師走末のお忍びに続いてずいぶん早い。華やかに身繕いした男と不満げな女の間で、指貫の裾に纏わるように付いてまわって甘える幼女。源氏は娘を宥めたものの、桜人の詞章「明日帰り来む」と口ずさんで、紫上の反撥を買ってしまい、あなたの方が大切ですよと返歌して機嫌を取る。ありがちといえなくもない家庭の景だが、この場は、微妙な空気もわからず、はしゃぎまわる明石姫に収束していく。文脈からは「歩きたまふ」でいったん切れて幼女のかわいさが浮き上がり、それが「人」を修飾して、紫上の幼子への想いとなり、源氏が赴く先の明石君の「めざまし」さも許す気持ちになるといって、幼子を慈しむ紫上と実子でないのを残念がる女房の姿で締めくくられる。この、幼子に免じて明石君の不埒さを大目に見る、という紫上の心理は、⑴の若菜上巻の一歩前、前段階ということになろう。

この⑵では紫上は明石君を「めざまし」と意識している。ところが、さらに前、明石姫を引き取ってすぐの、袴着を終えたときの記述では、すこしく異なっている。

⑶待ち遠ならむも、いとどされば よと思はむにいとほしければ、年の内に忍びて渡りたまへり。いとどさびしき住まひに、明け暮れのかしづきぐさをさへ離れきこえて思ふらむことの心苦しければ、御文なども絶え間なく遣はす。女君も、今はことに怨じきこえたまはず、うつくしき人に罪許しきこえたまへり。（薄雲四三七）

源氏は明石君から娘を取りあげたという自責の念を持っており、明石君が乳母や姫君付きの女房に衣装を贈ってきたのを、母親としての情愛に加えて自分への注意喚起と察して、さぞかし自分を待ち遠しく思っていることだろう、娘を引き取った後に途絶えたら、娘が目的だったと思われかねないと、年内にこっそり訪れ、文も絶えず遣わしていた。それを紫上も、今となってはことさら怨みもせず、かわいらしい姫君に免じて大目に見ているという。つまり、⑵のわずか十日ほど前の時点では、紫上は光源氏をこそ許せないと思っていたことになる。この時点では明石君を「めざまし」と思っていないことに注意しておきたい。

考えてみれば、薄雲巻の⑵までは紫上が明石君を「めざまし」と思う

姿は語られていない。⑶のように源氏を怨む姿が語られてきたのである。源氏から「あやしうものはかなき夢を見はべりしか」と告白されて「うらなくも思ひけるかな契りしを松より浪は越えじものぞと」（明石二六〇）と心変わりを怨み、帰京して明石君について話した時は「身をば思はず」（二七三）とそれとなく怨んでいる。澪標巻で源氏が女の子が生まれたと語り、大切にする子細があると説明した時は怨んでいない〈注５〉。ところが、人柄や別れの夜のこと、琴の音に話が及ぶと、「我はまたなくこそ悲しと思ひ嘆きしか、すさびにても心を分けたまひけむよ」（澪標二九二）と顔を背け、「思ふどちなびく方にはあらずとも我ぞ煙に先立ちなまし」と独詠し、源氏が箏の琴を引き寄せ調絃までしてそそのかしても、「かのすぐれたりけむもねたきにや、手も触れたまはず」と、源氏に対して拗ねる、いわゆる男にとって可愛い嫉妬を展開していく。五十日の祝に使者を送り、その返書を読む源氏を流し目で見て「浦よりをちに漕ぐ舟の」（澪標二九六）と古歌をひいて怨み、上包みの筆蹟から「手などのいとゆゑづきて、やむごとなき人苦しげなるをかかればなめり」（澪標二九七）と相手を測り、源氏が上京した明石君を大堰に訪ねる時には、「斧の柄さへ改めたまはむほどや待ち遠に」（松風四〇九）と皮肉を言って送り出している。告白された時、帰京した時、女の子が生まれた時、上京して大堰に落ちついた時、とその都度、和歌や引歌、故事を駆使して、源氏に対する怨みが語られていく。紫上は、当初は明石君を許せない者と怒るのではなく、明石君に惹かれている源氏をこそ怨む姿、源氏に裏切られて悲しむ姿が描出されているのである。

では、明石君に対する「めざまし」はいつから、どのように語られているのだろうか。

平安仮名文学における「めざまし」の用法を分類し、作品を概観し文体史として考察した拙論〈注６〉で、群を抜いて多用されている源氏物語〈注７〉では、紫上側から明石君への「めざまし」が顕著であると述べたが、もう少し精査する必要がありそうである。

三　明石君をめぐる「めざまし」―源氏から紫上へ―

実は、明石君を最初に「めざまし」と捉えたのは、源氏であった。

⑷さやかにもまだ見たまはぬ容貌など、いとよしよししう気高きさまして、めざましうもありけるかな、と見捨てがたく口惜しうおぼさる。さるべきさまにして迎へむと思しなりぬ。さやうにぞ語らひ慰めたまふ。

（明石二六四）

帰京も明後日に迫った夜、別れに訪れた源氏は、初めて、それとなくわかる程度に明石君の容貌を目にしたのだろう、「よしよししう気高き」と見て「めざまし」と思い、そのため別れねばならぬのを残念に思って、しかるべき待遇で京に迎えようと考えるようになったという。この「めざまし」をどう解すればいいのか。「めざまし」は「目が醒めほど意外に感じる」意で、辞書類では優劣いずれにも用いると説かれ、優の例にここが引用されている〈注８〉。しかし、どうであろうか。ここで源氏は女を手放しがたいと考えるのだから、この「めざまし」は思いのほかすばらしいと驚いた意だと、まずは考えられよう。新編古典文学全集の頭注で「その身分からみて、それほどでもないと思っていた明石君の美質を、改めて見直す」と説くように、源氏は元受領の娘とは思えない気品の高さを、身分以上と評価して、改めて処遇を考えたと知られる。

ただ、「めざましうもありけるかな」との言いようがひっかかる。手放しでの賞賛とはどうにも解しにくいのである。

こうした「めざまし」は源氏物語に二例認められる。

⑸見返りたまひて、隅の間の高欄にしばしひき据ゑたまへり。うちとけたらぬもてなし、髪のさがりば、めざましくもと見たまふ。

「咲く花にうつるてふ名は包めども折らで過ぎうき今朝の朝顔いかがすべき」とて、手をとらへたまへれば、いと馴れて、とく、

朝霧の晴れ間も待たぬけしきにて花に心をとめぬとぞみる

と公事にぞ聞こえなす。（夕顔一四八）

⑹尼君の御前にも、浅香の折敷に、青鈍の表折りて、精進物を参るとて、「めざましき女の宿世かな」と、おのがじしはしりうごちけり。（若菜下一七五）

⑸は、源氏が六条御息所の許から帰る時、お見送りする中将君の、折に合った衣装、「たをやかになまめ」いた姿態に目を留め、隅の高欄に坐らせ、分を守って気安くしない態度、髪が衣にかかる美を「めざましくも」と見て、「咲く花」と盛りの朝顔になぞらえ、ご主人から心移りするという不名誉は避けたいが、今朝の君を見過ごすことなどできないよ、と詠みかけて手を捉える。しかし、中将君はその「花」を御息所に詠み換え、朝まだきに帰ろうとするつれない源氏への非難として、事無く受け流す。まことに見事な対応である。ここで浮き上がってくるのは御息所の女房の優秀さである。その優秀さから、女房がこうなら御息所はさぞかしと想像させる。しかも、「めざましくも」の「も」からは、女房としてはたいしたものだと感じ入りつつも、そこには埒を越えてなまいきだとの感情が底流していよう。⑹は明石入道の祈願成就御礼の住吉参詣で、明石尼君も同道され、立派な精進物が供された。それを見物の世人は「めざましき女の宿世」と陰口を言っているから皮肉の賞賛である。⑸も⑹も分を超えているとの思いが意識の底にあっての「めざまし」だから、手放しの賞賛ではない。とすれば、⑷の、源氏が初めて明石君の容貌をほの見た時の「めざましくも」も同じで、身分のわりにはできすぎ、という意識が存しているといえよう。うつほ物語の右大将仲忠も太政大臣忠雅から同様に思われており、文脈や場面をよく読めば、平安仮名文の「めざまし」は上から下への身分意識が自明の語で、「いみじ」のような優劣の両様性はないと考えられよう。

そうした源氏の身分意識が、紫上に引き取りを持ちかけることばに反映している。

⑺「ここにてはぐくみたまひてむや。蛭の子が齢にもなりにけるを、罪なきさまなるも、思ひ捨てがたうこそ。いはけなげなる下つかたをも、紛らはさむなど思ふを、めざましと思さずは引き結ひたまへかし」と聞こえたまふ。（松風四二三）

大堰から帰邸した源氏は、不機嫌な紫上にまず、「なずらひならぬほどを思しくらぶるも、わろきわざなんめり。我は我と思ひなしたまへ」（松風四二二）と教え、暮れかかる頃に参内し、宿直にもかかわらず夜深く退出して、紫上に語りかけたのが⑺のことばである。かわいらしい女の子を見てきたのだが、ここで、あなたが育ててくださいませんか。三才になっていて袴着をしなければいけないのだが、あなたが明石の女を「めざまし」と思うのでなかったら、袴着の腰結役をしてやってくださいよと頼んでいる。朝方は、明石の女はあなたとは階級が異なるのだから嫉妬することなどないんですよと格差を言ってご機嫌取りに努め、帰邸した夜更けには「めざまし」とお思いでしょうがと養育の話を持ちかける。源氏には⑷のように明石君を「めざまし」とする意識が当初からあって、明石の女は「なずらひならぬ」身分にすぎないと紫上をなだめ、それをことばとして現わしたのがこの「めざまし」なのである。「めざまし」は、紫上を持ち上げ、安堵させ、養育話を効果的に運ぶ有効なことばとして紫上に呈示されたと考えられよう。

以後、紫上が明石君を意識にのぼせる時に、「めざまし」が用いられていく。

⑻「さりとも明石の列には、たち並べたまはざらまし」とのたまふ。

なほ北の殿をば、めざましと心置きたまへり。姫君の、いとうつくしげにて、何心もなく聞きたまふがらうたければ、また、ことわりかしと思し返さる。（玉鬘一二六）

これは玉鬘の引き取りに際して光源氏が、紫上に昔の夕顔のことを打ち明け、生きていたら明石君と同じくらいに扱っただろう、かわいい人だったと話した時の反応である。紫上はそんなことを言っても、あなたはその方を明石君と同列には扱わないでしょうよ、明石君は特別待遇だわと切り返す。四年近く経っても明石君に「めざまし」と隔意を持っているのだが、可愛いらしい様子で無心に聞いて居る姫君に目を移して、源氏が大切にするのも「ことわり」と考え直す。(3)の薄雲巻と同じパターンだが、紫上が「ことわり」と思うのはなぜか。諸注釈は曖昧だが、姫君の様態が明石君を思わせるからではないか。ここで紫上には相手を認めなくもないという、本人に対する一種の興味が生じている。

以後は緩衝体としての明石姫君は語られない。明石君本人が迫り出してくる。

新春用の衣配りで源氏が選んだのは、紫上自身には紅梅・葡萄染め・薄紅梅の高貴さを示す紅系統のグラデーションだが、明石君には「梅の折れ枝、蝶、鳥飛びちがひ、唐めいたる白き小袿」で、「思ひやり気高きを」と見た紫上は「めざまし」（玉鬘一三六）とおもしろくない。

新春元旦の夕べ、女君たちの許を順に訪れて祝う源氏は、暮れ方、最後の明石君の許で「新しき年の御騒がれもや」と紫上を気づかいながも、「こなたに泊ま」ってしまう。明石女の寵愛は格別と女君たちが穏やかでないなか、紫上の許では「ましてめざましがる人々あり」と、女房たちの反応が語られている。それは紫上の感情でもあったろう。

年月を経て、明石姫の入内に際し、明石君をお付きの後見役とした時、初めて対面するが、その時にも紫上の感情は持続していたらしい。

(9)ものなどうち言ひたるけはひなど、むべこそはとめざましう見たまふ。またいと気高う盛りなる御気色を、かたみにめでたしと見て、そこらの御中にもすぐれたる御心ざしにて並びなきさまに定まりたまひけるも、いとことわりと思ひ知らるるに、かうまで立ち並びきこゆる契りおろかなりやはと思ふものから、御輦車など許されたまひて、女御の御ありさまに異ならぬを、思ひくらぶるに、さすがなる身の程なり。（藤裏葉四五一）

紫上は明石君のもの言いや態度に接して、なるほど、源氏の心を捉えるだけのことはあるな、受領の娘なのにと「めざましう」思う。明石君は紫上の気高い女盛りの容姿を、多くの女君のなかで源氏に熱愛され正妻格の地位を得たのももっともと理解する。紫上は本人に初めて接して、これだからと「許しなく」思った感情の淵源を再認識したのである。

ここで「めざまし」という感情がよくわかる。朝顔巻の女君評で、源氏は明石君を「この数にもあらず貶めたまふ山里の人」と言っているが、これを紫上が明石君に抱く「めざまし」と同じと解することはできない。明石君を「数にもあらず」と見るのは当時の身分社会では自明のことであった。したがって、「貶め」るだけでは「めざまし」とはならない。源氏は明石入道の代作返歌を「書きざまよしばみたり。げにもすきたるかなとめざましう」（明石二四九）見ているが、それは入道の風趣を認めてこその「めざまし」であった。「めざまし」の中核は意外性衝撃性だが、そう感じるのが上位の者だということを忘れてはならない。意外性は下位にある者や劣位にある者の、分を超えた優秀さを認めた時に生じる。言いかえれば、「めざまし」は上位にある者、自身の優位を自明のものと考えている者が、下位の者に浸食されたと感じたときの、防御する思いから発する感情だということができるのではないか。

四　自己卑下―明石君、そして紫上へ―

下位にある者もそのことを知悉している。それが明石君である。

⑽人の御ありさまもここらの人の御中にすぐれたまへるにこそは、と思ひやられて、数ならぬ人の並びきこゆべきおぼえにもあらぬを、さすがに、立ち出でて、人もめざましと思すことやあらむ、わが身はとてもかくても同じこと、生ひさき遠き人の御上も、つひにはかの御心にかかるべきにこそあめれ、（薄雲四二八）

源氏から娘を紫上の養女にと望まれた時、明石君は悩む。源氏は紫上が子煩悩だと安心させたが、好色の噂が高かった源氏が紫上に定まったのは宿世もあるが、人柄もあまたの女人のなかで際立ってすぐれているのだろうと推測し、数ならぬ自分が立ち並べる身分でもないのに、娘を連れて二条東院に移り住んだら紫上に「めざまし」と思われるだろう、と危惧している。「めざまし」と思われると予測する以上、明石君は紫上にとって自身が脅威となると考えていることになる。それは女としてであろう。紫上は明石君を源氏を惹きつける女として「めざまし」と思うが、⑵⑶の時点では娘を奪ったと同情もしている。⑻以降はそれもない。

明石君は紫上に卑下して生きていく姿がめだち、忍従の日々を過ごしていると考えられてきた。こうした、目下で劣る者が、自身が「めざまし」と思われるであろうと卑下するのは、源氏物語独自の用法なのだが、明石君は初音巻の元旦では源氏の泊まりを誘う演出をするなど、それなりに手管を尽くしている。明石君は娘の件では忍従したであろうが、自身の女としての魅力も知悉していて、それなりに努め対応している。

そうした意識は、若菜上巻で女三宮降嫁を受けいれた紫上にも存していたのではないか。年月を経て、今度は紫上が、明石君同様、自身が「めざまし」と思われる立場となってしまう〈注9〉。

⑾いかがおぼさむと思すにいとつれなくて、「あはれなる御譲りにこそはあなれ。ここには、いかなる心を置きたてまつるべきにか。めざましく、かくてなど咎めらるまじくは、心安くてもはべなむを、かの母女御の御方ざまにても、疎からず思し数まへてむや」と卑下したまふを、（若菜上五二）

源氏が女三宮の降嫁を承引したと告げた時、紫上の反応は、予想外のものであった。紫上は自身が女三宮から「めざまし」と南町居住を咎められる可能性を述べ、女三宮の母女御は父式部宮の異母妹だから、私をその縁と考えてくだされば、と卑下する。劣り腹の女王と鍾愛される内親王とでは格差があり過ぎる。ここはそれを意識したもの言いで、女三宮に対して卑下するからには、自身が女三宮に「めざまし」と思わせるだけの立場を持っていると自負してのことにほかならない。と同時に、この言いようで源氏にそれとなく愛の確認をしたとは考えられないか。

紫上の場合が悲劇に繋がるのは、明石君が紫上に対して自身を「めざまし」と卑下し、紫上も明石君を「めざまし」と思う緊張関係にあるのに、女三宮が紫上に対しておもしろからず思うとは一言も語られないところにあろう。女三宮は「何心もなく」、紫上を対抗者慮外者と意識しない。「めざまし」と思うのは乳母たちや世間である。

⑿御乳母などやうの老いしらへる人々ぞ、いでや、この御ありさま一所こそめでたけれ、めざましきことはありなむかし、とうちまぜて思ふもありける。（若菜上七三）

⒀「院の、あまたの御中に、また並びなきやうにならはしきこえたまひしに、さしも等しからぬ際の御方々にたちまじり、めざましげなることもありぬべくこそ。いとよく聞きはべりや。」（若菜下二二〇）

⑿は婚姻四日目、乳母らが、初めて昼間に訪れた源氏の立派な姿に接して、釣り合うはずもない宮を思い、「めざましきことはありなむかし」と紫上の存在を警戒している。また⒀では紫上発病の後、柏木が、女三

宮は朱雀院があまたの御子の中で二人とないほどかわいがっておられたのに、格下の妾妻と一緒に扱われて「めざましげなること」もあるに違いないと義憤にかられている。女三宮を想うあまりの極端な言い条だが世間の考えを言い表していよう。紫上の包囲網は大きい。明石君は(9)の対面で、紫上が源氏の心を射止め、愛され続けていること、明石姫入内時に示された社会的地位からその優位を認め、若菜下巻でも源氏に「めざましき」者なのによくしていただいてと語って、卑下し続けている。

しかし、紫上の方は、女三宮の許に出向いて挨拶し、源氏との間にも「へだて」を持つようになっていく〈注10〉。明石女御には慕われても、第二部の紫上の状況は安定したものとはけっしていえないのである。

五　「むつまし」「親し」

では、(1)の若宮誕生によって、紫上の明石君に対する感情が「むつまし」に変化したという「むつまし」は何を意味しているのだろうか。

平安時代の語を考える際、現代語と語形が同じだと、ややもすると、語義も同じと解してしまいがちである。「むつまし」もそうした語の一つで、類義語との相異が充分に検討されなかったのが一因と思われる。

「むつまし」の類義語は「親し」で、いずれも「うとし」を対義語とする。形容詞の機能から考察した以前、「むつまし」は感情形容詞、「親し」は評価形容詞と述べた〈注11〉。ここではどんな人物間で、どんな事態状況に用いられているかからみていこう。

つぎの表はこの二語が用いられた関係を、血縁姻戚の「親族」関係、帝と臣下、主人と家司・女房の主従関係、官僚機構などの「上下」関係、夫婦や友人同僚、その他の「情愛」関係に分類している。なお、うつほ物語には「むつましき疎き」と詠む和歌、源氏物語には夕顔の火葬の煙がのぼる空を「むつまし」と想う和歌が認められるが、これらは「情愛」関係の「その他」に含めている。ちなみに八代集の「その他」五例も、女郎花や松、ほととぎす、宇治の地名の、人間以外に対してである。

	むつまし											親し										
	親族				上下				情愛			親族				上下				情愛		
	親子	兄弟姉妹	叔父甥従兄	養子姻戚	臣下	家司随身	女房	官人職階	夫婦	友人同僚	その他	親子	兄弟姉妹	叔父甥従兄	養子姻戚	臣下	家司随身	女房	官人職階	夫婦	友人同僚	その他
八代集					1				3		5											
伊勢物語									1		1											
大和物語					1	1				1												
蜻蛉日記	1																					
落窪物語				2		1				1			1	1								
うつほ物語	2	5	1	3		8		1	3	5	6					2						
枕草子										5												
源氏物語	2	6	3	3		32	5		4	4	9		5	4	7	15	21	2	3		3	2
紫式部日記							2															

知られるように、「むつまし」は伊勢物語以降連綿と用いられているが、「親し」は和歌に用いられず、散文も落窪物語とうつほ物語に二例ずつにすぎない。ところが、源氏物語では「むつまし」六八例、「親し」六二例と拮抗している。古今集仮名序には「世にわび、親しかりしも疎くなり」と認められるから「親し」が存しなかったのではない。「親し」は源氏物語になって多用された語だと考えられよう。

辞書では「親し」は本来的な血縁関係がない者間に、「むつまし」は男女間に多く用いると説いており〈注12〉、近年の『古典基礎語辞典』（角川学芸出版、二〇一一年一〇月）に至っては血縁を、親子兄弟の「内」と、親代わりや異腹の兄妹、従姉妹叔父甥婿などの「外」とに分け、「むつまし」は「内」と夫婦関係にある者間に用いると説く。

しかしながら、「夫婦」間の「むつまし」は、伊勢物語に紀有常と妻に一例、うつほ物語に帝と女御間に三例、源氏物語でも帝と女御間に三例、源氏と花散里に一例の計四例にすぎない。夫婦関係を主な用法と説くのは用例の少なさから肯んぜられない。あるいは後撰集と拾遺集で「むつましき妹背の山のなか」（後撰二一四）「むつましき妹背の仲」（拾遺一〇九五）と詠んでいるのが影響したのかもしれない。

「親族」間でも、落窪物語では「親し」は姪と叔母の「外」と同腹の兄弟の「内」の混在、「むつまし」は婿と義母の「外」二例、うつほ物語の「むつまし」も親子の「内」二例と、他は異腹の兄弟姉妹、甥・婿・義母の「外」九例で混在。源氏物語でも親子は「むつまし」だけだが、兄弟姉妹、叔父甥従兄弟、養子姻戚は「むつまし」九例と「親し」一六例で「内」「外」いずれにも用いられている。「むつまし」「親し」の相異は、血縁・非血縁や、男女間か否かでは解けないのである。

では、相異はどこにあるのか、それを、両語ともに認められ、数値も似ている源氏物語からみていこう。

さて、源氏物語で両語が多用されているのは「上下」関係だが、そのうち、「臣下」は「親し」だけで、「むつまし」は認められない。

⒁衛門督の君も院に常に参り、親しくさぶらひ馴れたまひし人なれば この宮を父帝のかしづきあがめたてまつりたまひし御心おきてなどくはしく見たてまつりおきて　（若菜下一三五）

⒂若宮の御恋しさのみ思ほし出でつつ、親しき女房、御乳母などを遣はしつつありさまを聞こしめす。　（桐壺二六）

⒁は柏木が朱雀院に常に参上し、親しく伺候していたので、女三宮を幼少時から大切にお育てになった次第を拝察していた、そのため思慕することとなったと明かしており、⒂は桐壺帝が、母更衣の死で里に下がった若宮恋しさに親しい女房や乳母を使者として派遣し、様子を尋ねさせているという。「臣下」は⒁のように廷臣として帝や院に伺候したり、⒂のように帝の命で女房が弔問に派遣されたり、中宮職の役人が諸事を処理したりと、職務や役目を命じられこなしている。それを「親し」とするのは職務をこなす過程で内情を仄聞したり、内意を承る程度に、帝に近しいということだろう。野分の段の使者は靫負命婦が務め、桐壺帝に藤壺宮の容姿を伝えたのは、先帝にも仕えていた桐壺帝付きの典侍で、母后の御殿にも「親しく参り馴れ」ていたと説明されているから、おそらく使者として頻繁に派遣されていたのだろう。

では、用例数も多い「家司随身」はどうか。

⒃「紀伊守にて親しく仕うまつる人の、中川のわたりなる家なむ、このごろ水堰き入れて、涼しき蔭にはべる」と聞こゆ。（中略）いと忍びて、ことさらにことごとしからぬ所をと、急ぎ出でたまへば、大臣にも聞こえたまはず、御供にもむつましき限りしておはしましぬ。　（帚木九二）

帝の物忌みで五月雨の宿直を続け、品定めで明かした翌日、源氏は久し

ぶりに葵上を訪れるが、従者に、宮中から左大臣邸は中神がいる方角で塞がっていると知らされ、方違え先は左大臣家に仕える紀伊守の家が適切と進言される。涼しげな普請をしたばかりとの話で、そこに通う女がいるわけでもないから、源氏は「いとよかなり」と急遽、左大臣にも告げずに出かける。その供に従えたのは「むつましき」者ばかりだという。「親し」は「仕うまつる」を修飾するように、配下として仰せのままに種々の仕事をする者で、彼らは主に家政を処理する。源氏の須磨流謫では残留して諸事を行うよう命じられたり、祝宴を執り行ったり、明石に派遣されたりと、職務や命じられた役目をこなしている。そのため、「親し」とされる家司受領の紀伊守は「下に嘆」いて迷惑がるも、源氏の方違えを受け容れざるを得ない。対して、源氏の供をする「むつましき」者は、源氏に進言したり、こっそり出かける源氏に付き従っている。

「親し」には限界がある。葵巻で若紫と光源氏が新枕を交わし、秘密裏に三日夜の餅を食した時、準備したのは腹心の惟光だが、翌朝、餅の箱を下げた時に「親しきかぎりの人々思ひ合はすることどもありける」（葵七四）と、身近に仕える女房たちだけは、餅の箱を見つけて初めて婚姻が行われたと悟っている。「親し」は「家司」四例、「宮人」「宮司」「殿人」「家人」を連体修飾しており、伺候や使者など廷臣としての職務や権門の主人から命じられた仕事をこなす者、公の職務や仕事を務める者に用いているが、身近に仕える女房でも職務に限定され、何から何まで知っているわけではないのである。

一方、「むつまし」は主人の個人的な事柄をこなす者に用いている。光源氏の場合は、某院を管理する親子や四九日の願文を書かせた博士など、夕顔巻の五例はすべて、秘密裏に某院を訪ねて女の頓死に遭遇した事態とその始末に認められる。お忍びで北山に瘧病の加持に赴く時、野宮に六条御息所を訪ねる時、須磨退隠で都を離れる前に父院の山陵を参拝する時、若菜上巻で年を経て朧月夜尚侍と密会する時など、お忍びの折には「むつましき」者を伴い、前斎宮入内では、自身が表面に出られないので殿舎等の準備を「むつまし」き修理宰相にさせている。

興味深いのは頭中将が、源氏が母の大宮を訪ねたと聞いて、すぐさま「御子どもの君達、むつましうさるべき廷臣たち奉りたまふ」（行幸三〇三）と子息と共に家司として出入りしている殿上人を差し向けて供応の準備をさせていることで、光源氏にかぎらず、権門貴族は平素からそれぞれの系列下の者を私事に使っていたとよくわかる。したがって、夕霧もまた、仲を裂かれた雲居雁への文使いや、落葉宮の小野に突然泊まると決めた時の諸事を託す者に、薫も浮舟説得に隠れ家へ派遣する弁に付き添わせる下臈侍、浮舟を京に迎える準備を託す者たち、浮舟の葬儀や四九日の法事を手配させる者、浮舟への手紙を託す小君に付き添わせる者に、匂宮が薫のふりをして浮舟に忍んでいく供に「むつまし」が用いられている。「むつまし」は貴人が内密に出かけたり、事を運んだりする際の諸事を担う者で、それゆえ信頼され目をかけられている。「むつまし」き者は、内情を洩らさない、信用できる者として、主人が好意を持って遇する者で、職務を務めるだけの「親し」き者よりも、主人により近い存在といえよう。

先行する落窪物語でも道頼は先駆けを「むつましき」者にさせており、うつほ物語でも兼雅はお忍びで俊蔭女と仲忠を迎えに行く時は「むつましき限りの人」を従え、仲忠も祖父俊蔭の故地、京極に赴き藏を開封する時には「むつましき人」を供にしている。一方、「親し」は女三宮や女御のあて宮に、臣下として奉仕する場合に認められる。

「親しき殿上人、むつましき上達部」と並列する場合は、源氏や頭中将にとって家司となる系列下の四位五位は「親し」で、同僚でもある上達部は「むつまし」と好意を持ち、派閥として連係する存在となろうか。

こうした相違がよくわかるのは源氏と空蝉の弟小君の場合である。

⑰ 昔、童にていとむつましうらうたきものにしたまひしかば、かうぶりなど得しまで、この御徳に隠れたりしを、おぼえぬ世の騒ぎありしころ、ものの聞こえに憚りて常陸に下りしをぞ、すこし心置きて年ごろは思しけれど、色にも出したまはず、昔のやうにこそあらねど、なほ親しき家人のうちには数へたまひけり。（関屋三六一）

ここでは小君に「むつまし」「親し」の両語が用いられている。源氏は、小君を空蝉への文遣いや手引きに召し使っていた頃は「むつましうらうたき」者として寵遇し、従五位に叙せられるよう目をかけていたのだが、不遇時に保身を図って離れていったので内心では「心置」くようになっていた。しかし、復帰した今は「親しき家人」、召し使う系列の一人としては扱っていたという。信頼してかわいがる「むつまし」と、配下として掌握する「親し」とは別である。源氏にとって小君を系列に置いておくことは寛仁大度を世に知らしめるうえで価値があり、小君にとっては源氏に属していると見せることで社会的な価値がある。「親し」は対象との関わりを示す評価形容詞、「むつまし」は対象への思いを表す感情形容詞で、ここでは「親し」と「むつまし」を過去と現在とで対照的に使い分けて、派閥の領袖たる源氏の政治力を語っているといえよう。

「情愛」関係はどうか。「夫婦」間に「親し」は認められない。述べたように夫婦間の「むつまし」は少なく、すべて夫から妻に対してで、伊勢物語一六段では「まことにむつましきことこそなかりけれ」と愛情が薄かったことを、うつほ物語では三例すべてが会話で、新帝が太后や当人に「むつましく頼もしき者には、かしこをなむ」（国譲下三九九）「かたみに馴らひて、あはれにむつましくこそ」（四〇〇）と、小宮を「むつまし」と語るが、あて宮を立后させ、あて宮腹の皇子を立太子させた今、宥めるためでしかない。源氏物語の桐壺帝は麗景殿女御を「むつましうなつかしき方には思したれど」（花散里五六）時めかなかったと説明し、冷泉帝から弘徽殿女御へ、今上から女二宮の母故藤壺女御への「むつまし」も愛情はあっても寵遇はしなかった説明、源氏と花散里も「いとむつましく、ありがたからむ妹背の契りばかりを聞こえ交はしたまふ」（初音一四七）と、もはや褥を共にせぬ仲となっている説明なので、熱愛する夫婦間は「むつまし」では語られない。地の文で「むつまし」と語られる妻は、いわば、次善の愛を注がれる存在なのである。

それは源氏の乳母子惟光に「むつまし」が用いられないのと表裏であろう。惟光は「むつまし」を遥かに超える存在である。おそらく藤壺宮にとっての王命婦もそうだろう。「むつまし」と語られる「家司随身」「女房」は側近や腹心というほどではないが、権門にとって信頼できる内輪の者という位置づけなのである。

「親族」間では、「言ふかひなきほどの齢にて、むつましかるべき人にも立ち後れはべりにければ」（若紫二一八）「人うとき御癖なればむつましくも言ひ通はず」（蓬生三三二）と、「むつまし」は温かな関係の表現というよりは、否定的な言辞で語られることが多い。

こうしてみると、「むつまし」は「夫婦」間でも帝から女御へ、源氏から妾妻へと、上位から下位に対して用いられ、「親族」間でも「むつましかるべき」なのにそうではないと否定的に用いられている。つまり、「むつまし」も、「親し」と同じく、たぶんに上位から下位への視線を含んだ語なのである。

「親し」は上位者との関係を説明する語、「むつまし」は上位者が下位者に向けて抱く、信頼を旨とした好意の情を語る語で、会話が多いうつほ物語が作中人物の関係をもっぱら感情面の「むつまし」で描くのに対して、源氏物語は配下たる説明の「親し」と感情表現の「むつまし」を使い分けて、人と人との微妙な関係を描出しているといえよう。

では、⑴の紫上が明石君に抱くようになった「むつまし」はどうか。「やむごとなし」と大切に思いはするものの、後見役の女房だから同格ではなく、目をかけ好意を抱く存在となったというにすぎない。「友人同僚」はうつほ物語の仲忠と祐澄・涼、仁寿殿女御と俊蔭女、源氏物語でも源氏と上達部のように、出自や社会的地位が同等でも上位からである。紫上の感情が「むつまし」に変わっても明石君との「上下」関係は崩れていない。御法巻で死を間近に感じる紫上は法華経千部供養を催し、参席した花散里と明石君に和歌を贈っている。明石君はそうした存在になったと示されるが、紫上は孤高の存在として、その哀しみゆえの祈り〈注13〉が語られていくのである。

六　紫上の「むつまし」

紫上は明石君を「むつまし」と思うようになったのだが、その変化を描く発想はどこから生じたのか。相似た記述が紫式部日記に認められる。

⒅宮の御前も、「いとうちとけては見えじとなむ思ひしかど、人よりけにむつましうなりにたるこそ」と、のたまはする折々はべり。

（紫式部日記二〇六）

紫式部はここで、中宮様が私に、昔、おそらく参上時のことだろうが、その頃はこうまでうちとけて会うようにはなるまいと思っていたけれど、他の女房よりほんとに「むつましく」なったこと、とおっしゃる時がしばしばあったと記している。式部も嬉しかったのでこのことばを記したのだろうが、「むつまし」は中宮が女房に話す、上位者から下位者へのことばで、紫式部は、私は中宮様の好意を得、目をかけられる存在となったと誇っているのである。こうした上位者が下位者に抱く感情の変化が若菜巻以降の紫上になにがしか寄与したとは考えられないか。

下位の者への思いの変化は、⒄の源氏は「むつまし」から「親し」の同義語だが、若菜上巻の紫上は「許しなく」の淵源「めざまし」から「むつまし」への逆で、しかも対義である。そんな紫上が「むつまし」と心情的に近寄ったのは、若宮を得た共通の歓びだけではあるまい。

若菜上巻は光源氏三九歳の冬から始まり、年末に女三宮降嫁が決まり。翌四〇歳の新春から師走まで算賀の宴が繰り広げられるが、その間の二月に女三宮が輿入れし、それまで正妻格として遇されてきた紫上は妾妻となり、女三宮に対して自らを「めざまし」と卑下する立場に陥り、夏には出向いて女三宮に挨拶する。若宮誕生はその翌年、光源氏四一歳の三月である。そこで明石君を「むつまし」と思うようになったと語られるのである。

その変容は自身がこれまで「めざまし」とみていた明石君と同じ立場となり、自己卑下を身をもって知ったことも大きいのではないか。明石君の存在を知った時、紫上は源氏をこそ怨み、つぎに源氏のことばから我が想いを「めざまし」と知り、源氏を惹きつける女、我が領分を侵食する女として「めざまし」と思い続け、明石君も自らを「めざまし」と卑下して対峙する緊張関係にあった。ところが、紫上が自身も女三宮にとって「めざまし」き存在と自覚して初めて、明石君の胸中に思い至り、共感をおぼえるようになったのではないか。自己卑下の「めざまし」には自負と苦痛が伴う。それを体感した紫上は「むつまし」と、明石君を我が領域に取り込んだとおぼしい。

明石君もその好意は感じ取ったのだろう。入道入山の消息を知った源氏との会話では数ならぬ私に目をかけてくださってと紫上を称揚している。しかし、続く女御との対話でも明らかなように、明石君の関心は源氏の愛情の行方にあって、紫上の自己卑下する心情には向かっていない。第二部の明石君は女としてではなく、源氏の意に沿った受け答えをする話し相手に変わっている。これを藤原克巳氏は、読者に空虚な感じを抱

かせ、紫上の位境を残酷に照らし出す〈注14〉と説いておられる。(1)の紫上の場合は、一見よろこばしいふうでありながら、「むつまし」に目を留めると、紫上の孤愁を如実に語っているといえよう。

注

〈1〉拙論「平安仮名文学と形容詞ー歌を核とする物語から作り物語へー」(『国語語彙史の研究四十』和泉書院、二〇二一年八月)

〈2〉「うし」「心うし」・「いとほし」「心苦し」・「めざまし」・「はづかし」「やさし」は拙著『源氏物語文体攷』(和泉書院一九九九年一〇月)・『平安文学の言語表現』(和泉書院二〇一一年三月)、拙論「『うるはし』の語史と源氏物語」(『源氏物語の展望』第八輯、三弥井書店二〇一〇年一〇月)・「『つつまし』の文学史」(「梅花女子大学文化表現学部紀要」第一四号、二〇一八年三月)

〈3〉小町谷照彦氏は「光源氏の『すき』と『うた』」(『源氏物語の歌ことば表現』東京大学出版会、一九八四年八月)の明石君の章で、明石君の物語は常に紫の上の存在を底流に置いて、両者の緊張関係によって進展していると説かれたが、感情形容詞に留意すると、また異なる相互の関わりが浮かびあがってくる。

〈4〉本稿での調査や引用は、散文作品は新編日本古典文学全集、八代集は新日本古典文学大系を用いた。うつほ物語の絵解きは含め、大和物語の増補章段・蜻蛉日記の巻末歌集・枕草子の一本は含めていない。私に表記を変えたところもあり、括弧内に出典や巻、頁数を記している。

〈5〉高田祐彦氏は「作中人物連関の方法」(「解釈と観賞別冊」至文堂、一九九八年五月)で、子どもの有無は二人の優劣を決める決定的な要素とはなりえないのだろうと説いておられる。

〈6〉「めざまし」考　初出「『めざまし』考ー源氏物語の文体」(「神戸大学国語教育学会『国語年誌』第一七号、一九九九年二月)

〈7〉和歌には認められず、先行散文でも、平中物語に二例、蜻蛉日記に一例、落窪物語に一例、うつほ物語に七例と散見する程度である。それが、源氏物語には六八例も認められ、派生語を含めると七十例を超えている。ただ、同じ筆者の紫式部日記では一例しか認められない。枕草子にも全く認められない。

〈8〉『古語大辞典』(小学館、一九八三年一二月)

〈9〉かつて紅葉賀巻では、源氏の外出をとめがちな若紫を、葵上の女房たちが、内裏辺りで見つけたけしからぬ女房だと「めざましきこと」と誹っていたが、内実を知らぬ断罪で、紫上のあずかり知らぬことである。

〈10〉拙論「『心置く』考ー源氏物語の関係表現ー」(関西学院大学「日本文藝研究」第六一巻、二〇一〇年三月)、拙著『源氏物語のことばと人物　Ⅲ章』(青簡社、二〇一三年六月)

〈11〉〈1〉、拙論「源氏物語のことばー『ゆかり』『親し・むつまし』『似る』ー」(『源氏物語　煌めくことばの世界』翰林書房、二〇一四年四月)

〈12〉『岩浪古語辞典』(岩波書店、一九七四年一二月)・『角川古語大辞典』(角川書店、一九八二年一〇月)は血縁の有無と男女関係、『古語大辞典』(小学館、一九八三年一二月)は血縁が近いかどうかで説く。

〈13〉原岡文子氏「紫上の祈りをめぐって」(「国語と国文学」二〇〇年五月)

〈14〉「たけき宿世」(「解釈と観賞別冊」至文堂、一九九八年五月)